

ご隠居忠敬の驚異的な体力と強い意志

前号のつづき



▲忠敬測量隊が測量した川走川の谷底の道から見上げる位置に架かる奥阿蘇大橋

忠敬が伊能家に養子に入って20年が経過し、有能な当主として活躍していた1780年代の江戸は、武家社会ながら大きな戦乱もなく、一般の武士たちは各自の身分や家柄を守り、伝来の作法や格式の維持に努めることが重要な日課となるほどの平穏な時を迎えていました。このため平和な江戸の街の人口は増加の一途を辿り、伊能家のある佐原の町は、この人口急増によって物資の大消費地となった江戸と利根川の水運をとおしてつながっていることから、川筋の農村地帯ながら酒造業などの商業も発展し活気に満ちていました。忠敬の足跡や業績などを調べて分かったことは、忠敬が17歳から農民と商人の二足のわらじを履き、両方の仕事で優れた才覚を発揮し、その上で豪商ともなり、この間に農民として鍛えた体力と、商人とし

て大切な算用能力やコツコツ精神などを身につけたからこそ、隠居したあと測量家となってから、当初は日本列島を北から南まで測量することなど毛頭考えてもいなかったにもかかわらず、55歳から17年間も歩いて歩きとおすことができ、日本列島をほとんどくまなく実測測量するということが可能となっているのです。

体力と知力とさらに大きな経済力のこの3つの人並み外れた力を兼ね備えた忠敬が、もしもこの時代に列島の測量と地図づくりを行っていなければ、当時ロシアを含む諸々の外国勢力がひたひたと鎖国中の日本に押し寄せ開国を迫っていたことから、その後の日本の歴史や進路が大きく変わっていた可能性もあり、その意味では忠敬の測量と地図づくりは私達の歴史に幸運をもたらした大きな出来事だったと言えるのではないのでしょうか。

忠敬は測量を開始して13年後、68歳のとき高森に測量にやって来ましたが、このころ流石の忠敬も歯が1本しか残っておらず、「各村々でご馳走を用意して歓迎してくれるが、残念ながら豆腐くらいしか食べられない」と江戸の娘に思わず弱音を吐いた手紙を出しています。そんな忠敬が連日晴天がつづく200年前の7月末、肥後領に入って測量を開始し、1日目には現在の国境の河内村（高千穂町河内）から岩神への旧道往還の登りの急坂や、2日目には草部から高森への道筋で最大の難所と思える川走川への狭くて急峻な下りと登りの道などを測量して通過しました。この川走川付近の測量の道筋を調べるため、ほとんど昔のままの姿で残っていて川走川の谷底へ下れる山都町側の道を何度か下ってみたところ、そこはただ体一つで歩くだけでも大変な急勾配の道で、多くの測量機材を持ち運びながらこの道で測量が行われたことを考えると、その苦労の程が思いやられる大変な所でした。そして、豆腐だけの食事では忠敬でもこの難所を測量しつつ上り下りすることはとても難しかったのでは、と思える場所でもありました。全国各地のこうした困難な所などの測量をここまで13年間もつづけてきて、この第8次測量の途中で初めて上記の様に娘への手紙での弱音も吐いていますが、それでもさらに測量作業に従事する隊員たちを指揮しながら昼間の測量でも常に先頭に立ち、晴天の夜には必ず天体観測も行い、その上、当日現地で測量や観測したことを宿舎の薄暗いロウソクの明かりの下でその日のうちに必ず数字を確認しながら清書し、5日後、10日後に測量に赴く村々の役人への手紙も毎日のように認めて差し出す、という一連の作業や行動をいつものように草部、高森、色見でも行い、このあとも休むことなく何年も連日つづけていくのですから、その驚異的な体力と頑張り抜くコツコツ精神には本当に驚くばかりです。いずれにしても、忠敬の体内に形成されていたこの強い意志、強い信念の固まりが忠敬の手足と頭を休むことなく動かし続けてくれたお陰で、高森にもその貴重な足跡がしっかりと標されているのです。

恐るべし！ ご隠居忠敬の驚異的な体力と強い意志 です。

平成25年1月号につづく